

ベルリン日本人国際学校における国語科の取り組み —「スピーチ朝会」「国語発表会」の実践を通して—

ベルリン日本人国際学校 教諭

前宮城教育大学附属小学校 教諭 山田 佳哉

キーワード：国語科，スピーチ，少人数，国語力の育成

1. はじめに

ドイツ連邦共和国の首都ベルリンの人口は約350万人。ヨーロッパでも屈指のメガロポリスであるが、面積は東京23区の約1.5倍であり、しかも多くの湖や公園があるため、緑豊かでゆったりとした環境の街である。今年6・7月にはFIFAワールドカップ・ドイツ大会が行われ、スポーツの面でも世界中から注目を集めた。むろんここでは様々な国籍の人々が生活している（全市民の1割以上が外国籍）。しかしながら、東西を分断していたころの「壁」の影響や日本経済の不況のあおりを受け、日系企業そのものが少ないために、日本人に関して言えば、他のヨーロッパ諸国の首都と比べるとその数は極端に少ない現状である。

ベルリン日本人国際学校もそういった時代背景を受け、全校児童生徒わずか20数名という小規模校である。しかしながら、児童生徒相互が互いにふれ合い、協力し合いながら学校生活を送っており、我々派遣教員も小規模校の特性を生かした教育活動の充実を日々目指している。

私自身、派遣1年目は、専科という立場で各学年の国語の授業を受け持つことになった。在外の教育施設ということもあり、特に国語科が受け持つ役割は国内以上に大きいと感じた。学校や家庭から一歩外に出れば、ドイツ語にあふれ、日本語を使う機会はほとんどない環境である。児童生徒の国語力を確実に、しかも正確に身に付けさせる意味でも「国語」が持つ意味合いは大きいのである。

そこで、日々の国語科の授業はもちろんであるが、教科の授業以外でも「国語力」を育成する必要があると考え、模索しながらも様々な取り組みをしてきた。ここでは、その中から「スピーチ朝会」「国語発表会」の2つを取り上げたいと思う。

2. 活動について

(1) スピーチ朝会

本校では、朝会を週一回行っている。教員が輪番で話をしたり、児童生徒会が中心となって行ったりするものであるが、その中の一つに「スピーチ朝会」がある。赴任した当時の「スピーチ朝会」は、当日話すことになっている児童が全校児童生徒の前で話をする程度のものであった。これを、国語科担当として再編することにした。

① 目指す児童生徒の姿の設定

この「スピーチ朝会」ではどのようなものを目指すのかを、全教員に対して共通に理解してもらうのが最初の取り組みであった。

そこで、「聞き方・話し方」を中心にした「目指す児童生徒の姿」を設定した。(表1)

② 児童生徒への指導

【目指す児童・生徒の姿】

「スピーチ朝会」は、朝の15分間である。その限られた時間の中でスピーチ（2人）をさせ、さらに小学校1年から中学生までを対象にした指導を行おうと考えた。スピーチの時間を除くと、指導は2～3分と短時間なだけに、ピンポイントの指導が必要になってくる。

そこで、3月までの期間を大きく3期に分けて段階を追って指導するよう試みた（下表参照）。



【ポイントを絞って】

≪第1期≫気付かせる段階	≪指導後の振り返りと次回の方角≫
第1回 話の聞き方について、学年部ごとにめあてをつかませる。	話の聞き方（姿勢）についてはうまくいったが、単に「聞く」だけで終わっている。「聞き方」そのものを指導する必要あり。
第2回 スピーチを聞いた中で、自分でよいと思ったところに気づかせる。	発言内容はまだ学年相応のものではないにせよ、挙手が多くなってきた。めあてを一つに絞って提示した結果か。
第3回 スピーチを聞いた後に、もっと知りたいことを考えて質問させる。	前回と同様、めあてを一つに絞って提示。発言する意欲が生まれてきているが、児童にとって、「よいところ」よりも「質問」の方が難しいことが読み取れる。
第4回 「よいところ」「質問」について振り返らせ、新たに意欲をもたせる。	発言しようとする児童が格段に多くなった。第一段階は終了。今後は、さらに具体的に発言できるような手立てが必要になる。
≪第2期≫具体的な発言の段階	≪指導後の振り返りと次回の方角≫
第1回 「質問」の仕方の例を挙げ、具体的に質問できるようにする。意図的な指名。	具体的にするために、四つの言い方を提示。全体的な意欲は増しているが、児童A、Bの意欲が気になる。発言の機会を確保する必要がある。 (以下省略)

③指導の実際

まず、「聞く」側であるが、回を重ねるごとに、スピーチ朝会の意味を児童生徒自身が理解し、スピーチの内容を楽しみにするようになったことを、発言から感じ取ることができた。少人数ということもあり、発言した児童名・発言内容はその都度記録しておく、次回の指導に生かせるようにした。

次に、「話す」側であるが、次第に工夫が見られるようになってきた。資料を提示しながら話をする児童や実際に思い出の品を見せながら語りかける児童など、学年に応じて様々な工夫が見られるようになった。

しかも、こうした全体での指導が、各学級の児童生徒の姿により影響をもたらした。国語以外の授業でも、相手の話が分かりにくいときは自分から質問をしたり、すすんで自分から発言したりするようになった児童の変容を学級担任から聞くことができた。



【資料を提示しながら】

(2)国語発表会

毎年2月に行われている大きな行事であり、保護者の関心も高い。前年度までは、児童生徒全員が作文を書き、それを音読で発表する形で行われていた。これに関しては、次の

ような課題が残されていた。「作文の発表ということで国語力の発表という思い込みがある。国語力の充実を本校の特色に上げるならば、内容をもっとつめる必要がある」(前年度の反省より)

国語科の行事として、もっと「日々の授業に直結した発表」が出来ないものかと、再編することにした。

①発表の内容について

国語科担当者と学級担任との打ち合わせが主になった。具体的には、どの学年をどんな内容で発表させるかが問題になった。学習指導要領に示されている「話すこと・聞くこと」等に立ち戻りながら、「日々の授業で培っている国語力をどう発表させていくか」について何度も打ち合わせをした。その結果、学年の系統性をはっきりさせながら、内容を決めることができた。(右表)

【系統立てた発表内容】

②発表の実際

どの学年の児童生徒も、自分のめあてを伝えてから発表に入った。動きをまじえながら表現した低学年、音読の効果を確かめるべく音声を中心に取組んだ中学年、方言にまで広げることで日本語の素晴らしさを伝えた高学年、そして古典の世界を伝えた中学部…。どの学年も発達段階に応じたものを、会場の人たちに堂々と発表することができた。

また、学年の系統性を明確にしたことで、発表を見ている児童生徒も、自分たちとは違う内容であることに気付きながら興味深く見ることができた。

また、日頃の学習やスピーチで培われた児童生徒の力を存分に感じ取ることができた発表会となった。



【日頃の学習の成果を発表】

3. おわりに

先にも述べたように、本校は全校児童生徒が20数名という小規模校である。私自身、「あまりに人数が少ないと、そうでない学校と比べて活動が限られてしまう」そんな思いを当初もっていた。

しかし、今回強く感じているのは「少人数は強みである」ということである。今回取り上げた「スピーチ朝会」でも、年間2～3回は全校児童の前で発表する機会が全員に与えられている。そのほかにも全員が主役になれる機会が本校には数多く存在する。学期末の「国語発表会」では、そうした力を随所に見ることができた。

また、国内、在外問わず、学校には様々な行事等が引き継がれている。しかしながら、大切なのは、「初めに行事ありき」ではないということである。本校では、在外の教育施設という特殊性から、保護者の仕事に関係しての入学・退学も非常に多い。今、目の前にいる児童生徒の力をいかに伸ばすことができるのか、それを一番に考えた上で、行事そのものの存在意義を確かめ合いながら、工夫して指導することが今後も大切であると改めて感じている。